



洗足学園音楽大学
洗足こども短期大学
附属図書館



図書館便り

第15巻 2号
2024年12月1日発行

目次

【創立100周年特別企画】

小嶋 貴文 大学副学長インタビュー	・・・・・・・・・・	2
山下 康介 先生	・・・・・・・・・・	10
清水 将仁 先生	・・・・・・・・・・	12
前田 康徳 先生	・・・・・・・・・・	13
西釋 英里香 先生	・・・・・・・・・・	15
嶋田 うれ葉 先生	・・・・・・・・・・	16
図書館セミナー	・・・・・・・・・・	17
利用者インタビュー	・・・・・・・・・・	19
図書館ミニコンサート	・・・・・・・・・・	23



創立100周年特別企画

小嶋 貴文 大学 副学長インタビュー

前号に引き続き

「副学長の生の声」を皆様にお伝えするべく、創立100周年特別企画としてお話をうかがいました



—まず、ご経歴についてお聞かせください。

はい。音楽は、東京藝術大学・大学院で作曲を勉強しました。大学院在学中に洗足学園で授業を持つことになり、その時は4年間しか務めなかったのですが、最初の2年間は大学と高校音楽科で和声やソルフェージュを教え、残りの2年間は中高の専任になって、当時まだ中学の音楽科があったのでその担任をやらせてもらいました。その後、洗足を離れて、大学時代の仲間と事務所を作って、アレンジしたり、演奏したりいろいろなことやっていました。

ファッションショーのバックバンドでモデルさんたちと地方を回ったり、ディナーショーをやったりしました。実は、ディナーショーでボーカルを務めたこともあるんだよ。

—お～！（湧き立つ職員たち）

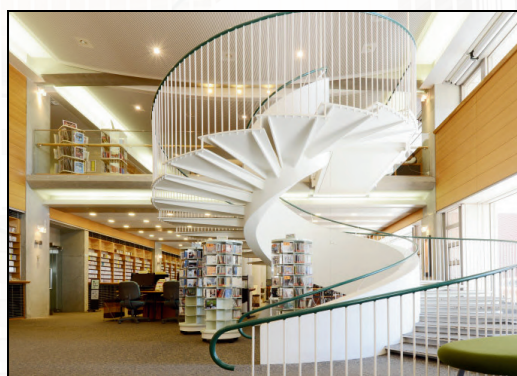
そんなことをしているうちに40歳が近づいて「これはまずい」とおもって、アメリカのバークリー音楽大学に留学しようと思立ちました。バークリーでジャズを学ぼうと思った理由ですが、特に深い根拠はなかったような気がします。

ピアノパフォーマンスコースでジャズを学んで帰国し、小さなジャズスクールで教えたりライブをやったりしていたんですが、それではとても生活できず困っている時に、当時洗足で教えていらしゃった寺島尚彦先生（『さとうきび畑』の作曲家）に呼んでいただき、洗足に戻ることができました。

最初は、電子オルガンコースの授業を1～2コマ担当していました。その後、音楽教室の室長、高校音楽科の科長、大学の学部長をさせていただき、今に至ります。

—そうすると、かなり前から洗足学園に関わりがあったんですね。

そうですね、20代後半から4年間勤めて、40代になって戻ることができました。



—作曲家を志したきっかけは何だったのでしょうか？

高校時代、漠然とですが政治関係のことをやりたいと思っていたので、一般大学の法学部に行きたかったんですよね。でも、高校3年生のころ行き詰って少し立ち止まった時期があったんですが、その時、受験勉強以外にいろいろな才能を持った仲間がたくさんいることに気づいたんです。音楽のことをよく知っていたり、絵が描けたり詩を作れたり。ものすごく魅力的だったんです。その影響だと思うのですが、自分も何かクリエイティブなことをやりたいと思うようになりました。でも、それまでそんなことはしたことがなかったから、何もできなかった。

ただ、少しピアノが弾けたことと絶対音感があったというだけの理由で、音楽をやろうと思ったんです。それで、高校3年生から作曲の勉強をして2年浪人して藝大に入りました。

—高校時代に転機になる出会いがあったのですね。

様々なご経験をされてきたと思いますが、副学長として洗足学園に対するお気持ちはどのようなものでしょうか？

私が学部長になった年に、ジャズコースが仲町台から溝の口に引っ越してきて、同時にロック&ポップスコースがスタートしました。その後、続々と新しいコースができ、今では大学全体で19コースとなりました。

新しいコースが洗足に馴染んで、全体で一つの文化として定着するのはそれなりに時間が必要でしたが、それが、日本武道館での100周年記念式典（2024年10月15日、16日開催）で一つになり、頂点に達したと思うんです。

武道館での式典は本当にすばらしくて、学生も先生たちもスタッフもみんな一生懸命やってくれて、そんな姿に、照明さんや音響さんまで心を動かされて、まるで奇跡のステージでしたね。洗足学園が次の100年に向けて新しい形になったのを感じました。前田若尾先生が苦勞して創り上げた学校が、今度はみんなの力で新しい形になった、そんな印象です。

—今のお話から、いろいろなところで見守ってくださっていることを強く感じました。

そう言ってくれるとホッとするけど、具体的なことはもう若い人たちがガンガンやってくれるから、自分は何もしていないんですよ。



—俯瞰して見守ってくださったり、礎を築いてくださったりした先生方が
いらっしゃるからこそ、今回の式典があったのですね。

本当にそうです、先生方の作品や演奏、パフォーマンスは本当にすごい！自分の定年の年が
洗足の100周年にあたり、すばらしいイベントを目撃できたことは本当にラッキーでした。

それから、学生さんのパフォーマンスも本当に堂々としていて、すごかったですね。自分なん
かあそこに立ったら足が震えて何もできないと思う。彼らは本当にすごいです。

—武道館でパフォーマンスをした学生の皆さんが、とても場慣れしていると感じました。
1日目のオーディションを勝ち抜いた全員がすごく個性的で、
5組とも全く違う方向に進んでいるのが感じられました。

学生さんたちがそれぞれの思いを堂々と主張しているのを見て、すごくいいなと思いました。



—式典を見ていて感じたのですが、各コースの垣根がなくなっているように感じました。
“クラシックだからクラシックだけをやる“というわけではなく、
いろいろなジャンルの知識が必要な時代になっていると感じました。

全く同感です。垣根がなくなっていくことはすばらしいことです。ただ、垣根をなくしていく
ためには、今まで以上にそれぞれの専門を深く追求することが必要になります。それぞれの専門
あるいは個性を追求し、それをしっかりと持った上で他ジャンルと交流すると、様々な化学変化
がおきて想像もできなかったような面白いことが起きます。そして自分の専門に戻った時、今ま
でやってきた自分の音楽を新しい目で見直すことができるかもしれません。

重要なのは、一人ひとりが自分に自信を持ち、自分が良いと思う方向に進むことです。他人のことなど気にする必要はない。でも、自分と違う考えには謙虚に耳を傾けるといいですね。なんか矛盾していることを言っていますが、自分はそう思っています。

—別ジャンルを極めた者同士とのコラボ、とても素敵ですね。

そう思うと、洗足は「やってみたい」を実現しやすい環境ですね。

そうです！こんなに「やってみたい」が実現できる大学は他にはありません。その意味でも、洗足学園は本当に素晴らしいと思います。

ところで、全然本に関する話をしてないけど、大丈夫でしょうか！？

—たしかにそうでした！



—それでは、ぜひおすすめの1冊を教えてくださいませんか？

(唸りながら) 1冊に絞るのは難しいですね。少しずつ読み直しているのは聖書です。昔先輩たちから、「西洋音楽をやるのなら聖書ぐらいは読まないとだめだよ」と言われましたが、そう簡単に読めるものではありません。それが西洋音楽にどのような影響を与えたかということになると、聖書そのものだけでなく、ユダヤ教の時代の歴史から、ほかの宗教との関係、中世の神をめぐる論争など、広範囲の知識が必要になってきます。聖書はお勧めというわけではありませんが、西洋文化に大きな影響を与えた聖書ですから、じっくりと読んでいく価値があります。



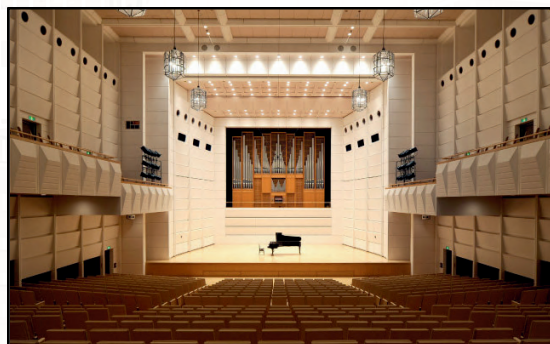
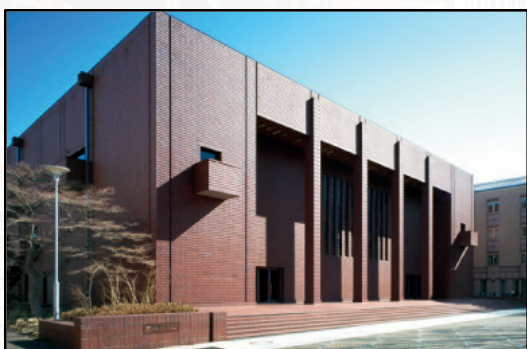
—先生は、大人になってから書籍の価値や意義に気づかれたのでしょうか？

そうですね。こどものころはまったく本は読みませんでした。高校生のころですかね、背伸びして当時の評判になったような小説や哲学の本を買った記憶はありますが、ほぼ意味はわからなかったと思います。

作曲をやり始めてからは、「芸術はゼロから生み出すものだ！」と思い込んで、ただただ、白い五線紙を眺めていたような状況でした。

残念ながら、実際に物を創るというのはゼロからじゃないんですよ。今自分が話してることも、どこかで使われた言葉や聞いた言葉の積み重ねだし。

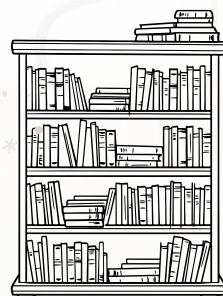
そうしたものをため込んで、自分にぴったりだと思ふものや、違うと思ふものを意識的、無意識的に選びだして自分の表現を作り出していくのが創作活動じゃないかと今は思っています。読書に限らず、何に対しても目や耳を閉ざさずにもっと吸収してくればよかったと思う今日この頃です。



—図書館はよく利用されておりますでしょうか？

CDを借りたり、ちょっとした調べものをするために利用しています。音楽史や文化史に関する本がもう少し充実していると嬉しいかも。

—参考になります。



ある評論家が「ベートーヴェンの作品を聴くとき、彼の偉大さや、その後の文化に与えた大きな影響などのフィルターを取り除いて、純粋なベートーヴェンを聴きたい」と言っていました。その時代の雰囲気の中で、リアルタイムで、生のベートーヴェンを聴きたいという意味でしょうね。

それは実際にはできないことですが、近づくことはできます。それはその時代の生活感や雰囲気、文化や政治など、できるだけ細かく調べることです。多分、文化史の視点だと思うけど、自分も大切だと思います。

タイムマシンに代わって時代をさかのぼって行けるのは、本の大きな役目の一つなんだと思います。（今は映像や録音を残すことができますが）図書館に、そういった本がもっと多くあれば、音楽が生まれた時代や背景をより深く理解できると思います。

—先生の今のお話をお聞きして、学生時代に習った先生も、今のお話と似たようなことをおっしゃっていたのを思い出しました。

ただ音を追うだけでなく、歴史や作曲家がどのような経緯で、どんなことを感じて作曲したのかを理解することが、最終的には自分の財産になると強調されていました。

その通りなんだよね。

話は違っちゃうけど、楽曲分析なども、ただ曲の構造を分解するだけでは、すぐには演奏の役には立たないことが多い。特に演奏家にとって役立つ楽曲分析をするためには、やはりそのようなスタイルの曲が生まれた時代を研究して、その内容を分析に反映することも必要ではないかと思っています。

—演奏や作曲において、知識がどのように生かされるのかということを知ってハッとさせられました。図書館を、楽譜を見るだけの場所として使っている学生が多くみられます。

ですので、知識を増やすことが自分のやりたいことに繋がるのだということを、学生にも伝えていけたらと思います。



—最後に、学生や教職員に向けてメッセージやエールをお願いします。

さっきも言ったと思いますが、学生の皆さんには、「自分を強く認めること」を忘れないで欲しいと思います。自分を強く認めると言うことは、自分が何かを選んだら迷わないということです。「自分はこれが好きだ」と思ったら、まず周りに捉われずに前に進んでください。勿論、自分がやったことに対しての周りの評価は気になるでしょう。誤解を恐れずに言えば、他人はあまり当てにならないものです。

苦しくても自分で自分を厳しく評価し、日々成長し、納得のいく人生を生きてください。こう書くと、なにかいつも真剣に生きなくてはならないように思うかもしれませんが、そうではありません。力を抜いて自然体でいる方が、自分の声がよく聞こえるものです。難しいかもしれませんが試してみてください。自分も皆さんに負けないよう、残りの時間を丸ごと自分の人生として、自然体で音楽に向かいたいと思います。

図書館は静かな空間ではありますが、職員の皆さんのお力で知的に、にぎやかな場所にして下さい。最新の情報の発信や、いろいろな企画の実施など、楽しいことはたくさんあると思います。学生の役に立つ本がたくさん入って、先生方からも「こんな本があったらいいよ」という提案がどんどんあったらいいですね。皆さんがアイデアを出し合って、さらに生き生きと活躍できる図書館になることを祈っています。

—今後も職員一同、精進してまいります。

本日は、素敵なお話をお聞かせくださり、ありがとうございました。

2024.10.17



ヘンリー・マンシーニ 生誕100周年によせて

山下 康介 先生

(音楽・音響デザインコース)

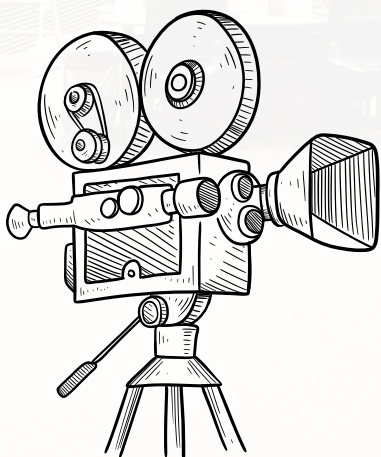
今年で生誕100周年を迎える作曲家ヘンリー・マンシーニであるが、ちょうど没後30年でもある。言うまでもないが、その70年の生涯のうちに数えきれない多くのヒット作を生み出し、20世紀を代表する映画音楽作曲家だ。マンシーニの音楽といえば、ブラスやリズムの効いた軽妙なサウンドから、美しくも儂いストリングスの重厚なサウンドまで、非常にバラエティ豊かだ。共通して言えるのは、そのシンプルでウィットに富み、かつユーモアと愛に満ちたメロディは、一度聴いたら忘れられないということだろう。

マンシーニは1924年4月16日、アメリカ合衆国オハイオ州クリーヴランドの生まれだが、私は彼の描くメロディには、どこことなくヨーロッパの香りを感じるので、アメリカ人であることを一瞬忘れてしまう。1920年代といえば、ちょうど無声映画からトーキー（映像と音声の同期）に変わるタイミングである。また、ディズニースタジオが設立されたのも1923年だ。つまり、これから世の中のエンターテインメントが大きく発展していく、その真っ只中を生きることになったと言っていいだろう。父親がオーケストラのフルート奏者だったこともあり、その影響でピッコロを吹き始めるというのも興味深い。その後フルート、ピアノと学び、カーネギー学院の音楽科、ジュリアード音楽院を経て、1945年には、かのグレン・ミラー楽団にアレンジャー兼ピアニストとして入団することになる。1945年といえば、太平洋戦争が終戦を迎える時であり、音楽はビッグバンド全盛期である。こういった時代背景が、彼が作るサウンドの礎になっていることは間違いないだろう。その後、ユニバーサル・スタジオに入社し、音楽監督のジョセフ・ガーシェンソンのアシスタントを務めるなど修行しながら、『グレン・ミラー物語』（54年）、『黒い罌』(58年)などの映画音楽を手掛け、少しずつ頭角を表すようになる。TVシリーズ作品の『ピーターガン』（58年）の音楽も、一度聴いたら耳から離れないクセになるグルーブを持ったサウンドで、マンシーニの魅力が詰まっている。

映画音楽の作曲家は、たいてい特定の映画監督とのコンビを組むことが多いが、マンシーニはブレイク・エドワーズという監督作品のほとんどを手がけている。『ティファニーで朝食を』（61年）をはじめ、『酒とバラの日々』（62年）、『ピンク・パンサー』シリーズなどがそうだ。

『ティファニーで朝食を』では、劇中歌『ムーン・リバー』も作曲し、スタンダードナンバーとして今日まで親しまれていることは周知の事実ではないだろうか。

そのほか、『ハタリ!』（62年）で書かれた『子象の行進』という楽曲では、お得意のピッコロのフレーズが印象深いき、『シャレード』（63年）のメインテーマは、ラテン風3拍子のリズムと、朗々と歌われる弦のメロディのコントラストがたまたなく美しい。『ひまわり』（70年）の悲哀たっぷりのメロディにもはや説明は要らないだろう。手がけた作品のどれもが名作揃いだ。それらの作品がいまだに色褪せないのは、マンシーニの音楽あつてのことだろう。映画の発展と共に生きた作曲家であり、時代にマッチした作家性を持ち合わせたマンシーニの音楽、その全てがオススメだ。



私の推薦CD

清水 将仁 先生
(ピアノコース)

今年は、洗足学園創立100周年という記念すべき年になります。

クラシック音楽の世界でも、その長い歴史の中で「周年」という節目にちなんだ、さまざまなイベントが行われてきました。私とその「周年」という言葉で思い浮かべるもののひとつに『史上最大のコンサート（邦題）』と銘打たれたCDがあります。これは、かつて老朽化と経営難で取り壊しが計画された、音楽の殿堂カーネギーホール（ニューヨーク）を救うべく開催された「カーネギーホール創設85周年記念・義援金募集特別演奏会」のライヴ録音です。

出演者の顔ぶれは信じがたいほど豪華なもので、バーンスタイン、ホロヴィッツ、メニューイン、アイザック・スターン、ロストロポーヴィチ、フィッシャー＝ディースカウ、ニューヨーク・フィル。これだけの巨匠たちが一堂に会し共演することなど、奇跡に近いことです。

若い頃にこのCDを聴き、「アンサンブル」について、とても深く考えさせられたことを忘れることが出来ません。それまで、物理的に合っている、いわゆる「整った」演奏録音を当たり前のように聴いていた私には、本当に衝撃的なものでした。

ピアノの巨匠ホロヴィッツが伴奏（個人的には「伴奏」という言葉があまり好きではありませんが）をすること自体、とても稀なことです。それがここでは、ロストロポーヴィチとフィッシャー＝ディースカウの伴奏をしています。今でこそ、伴奏は脇役（主役より下位）といった認識は減ってきていると思いますが、ここでのピアノは、まさに時には脇役、時には主役、時には指揮者のようにも感じられるのです。また、アイザック・スターン、ロストロポーヴィチと演奏しているチャイコフスキーのピアノトリオ『偉大な芸術家の思い出』では、スリル満点でありながら、音楽の高みに到達している巨匠たちだからこそできる演奏での「語らい」があり、心を深く揺さぶられ感動するばかりです。何度聴いても、あらたな発見と喜びがあります。

最後に出演者全員で演奏された『ハレルヤコーラス』は、個々の張り上げる歌声が時折聴こえてきて、この演奏会の微笑ましい締めくくりになっています。ぜひ、機会があったら聴いてみてください。おすすめです。

シンセサイザー専攻から始まった 私と洗足学園音楽大学の歩み

前田 康徳 先生
(音楽環境創造コース)

今日の音楽の発展は、1982年にローランドを中心に規格化された世界規格である「MIDI規格」によるところが大きいと思います。この規格で製造されたシンセサイザー同士、あるいはパソコンなどを機種やメーカーに関係なく、自由に接続して音楽を作ることができるという画期的な規格であったといえるでしょう。MIDI規格の実際の信号の送受信は、0と1で表現するいわゆるデジタル信号です。このデジタル化が音楽に革命をもたらしたといっても良いと思います。

翌年の1983年には、ヤマハからMIDI端子搭載のオールデジタルシンセサイザー「DX7」が発売されました。すべての処理がデジタル信号によるエポックメイキングな機種となり、この新しいサウンドを活用した音楽が、次々に生まれていきました。

しかし、このMIDI規格を活用したシステムを縦横無尽に使いこなすには少々敷居が高く、コンピューターからシンセサイザーの音を鳴らすだけでも大変で、肝心の音楽制作にたどり着くまでしばしば時間を要しました。要するに、専門的な知識や技術が必要だったのです。そこで、シンセサイザーの音色作りや、コンピューター周辺に関する煩雑な作業を一手に引き受ける仕事、シンセサイザーマニピュレーターという仕事が存在していました。活躍の場は主にレコーディングスタジオでしたが、実は私もこのシンセサイザーマニピュレーター出身です。

このような専門分野について学ぶ学校は、MIDIシステムが主にCM音楽やポピュラー音楽の分野で盛況だった経緯もあり、当初は音楽系の専門学校ぐらいしかなかったように思います。一方、当時の音楽大学はクラシック音楽が全盛で、テクノロジーと音楽という視点はほぼ皆無でした。商業的な音楽を含めMIDI機器周辺の環境については、キワモノ扱いされていた節もあります。

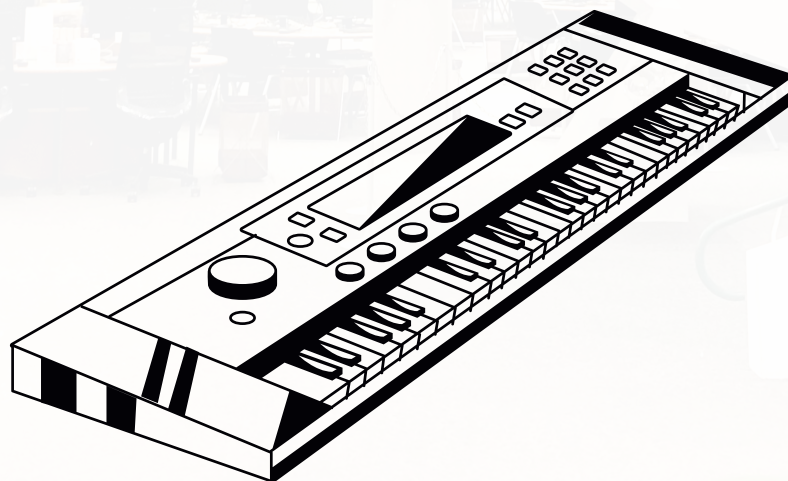
そのような時勢の中、小学校6年生頃からなんとなく読み始めた『サウンド&レコーディングマガジン』（リットーミュージック）の広告に突如出現したのが、当時の洗足学園大学のシンセサイザー専攻でした。設置が1989年度とのことですので、私が高校

3年の頃だったと思いますが、その広告に目が釘付けとなり、何度も隅々まで読んだのを覚えています。当然受験を意識しましたが、試験の項目に数理適性検査、あるいはそれに相当する試験があり、それに躊躇しているうちに受験の機会を逸してしまいます。数年後、紆余曲折の上奇しくも作曲専攻の受験に至りますが・・

シンセサイザー専攻設置以降も1996年度にジャズコース、2006年度にはミュージカルコース、2009年度にロック&ポップスコース設置というように、特にこの時期の洗足学園音楽大学の取り組みは、目を見張るものがありました。ちなみに、2002年度に大学名が洗足学園大学から洗足学園音楽大学に改名され、同時にシンセサイザー専攻も音楽・音響デザインコースへ継承され今日に至ります。

MIDI規格公開から42年、本学シンセサイザー専攻設置から35年ほど経過しますが、この間社会は大きく変化し、音楽のあり方もすっかり変わりました。それでも時代に取り残されることもなく、意気揚々と活動する学生たちの姿を見ると、常に社会のニーズに応じてきた学園の姿が浮かび上がります。伝統を大切にしながらも、テクノロジーと音楽の関係性にいち早く着目した先見により、現在の環境があるのかもしれないと思います。

学園100周年という節目に、個人的なことではありますが、シンセサイザー専攻を受験できなかったことや、一週間に渡る作曲専攻の入試に挑み、不出来ながら合格したときの喜び、学園生活、恩師など様々な記憶に思いを馳せる良い機会にもなりました。学園の一員として今後の洗足学園音楽大学の発展を願ってやみません。



『セロ弾きのゴーシュ』から 『のだめカンタービレ』へ

西釋 英里香 先生
(音楽学)

岩手県花巻市の宮沢賢治記念館には、詩人・童話作家として知られる宮沢賢治（1896-1933）が使用していたチェロが、妹トシが弾いていたヴァイオリンとともに展示されています。賢治は友人たちとレコードの鑑賞会を開き、合奏の練習にいそしむなど音楽にも造詣の深い人物でした。1926（大正15）年12月には東京で、きわめて短い期間ですがチェロを習っています。そして、このときのレッスン体験にも触発されて『セロ弾きのゴーシュ』を執筆したとみられています。

この賢治のチェロを今年の8月に観に行ったとき、記念館では「刊行100周年 二冊の初版本」という特別展が開かれていました。賢治の生前には『心象スケッチ 春と修羅』と『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』だけが出版されましたが、それが100年前の1924（大正13）年のことだったのです。

『春と修羅』は、死にゆく妹の天上での幸福を願う「永訣の朝」など69篇の詩から構成されています。そのなかで最も長い「小岩井農場」は、賢治が1日ばかりでこの農場を歩いて目にした風景、そこで感じた心象を書きとめた詩ですが、しばしばベートーヴェンの《交響曲第6番「田園」》と関連づけて論じられています。『セロ弾きのゴーシュ』で主人公が練習・演奏している「第六交響曲」も《「田園」》とみられており、この交響曲が賢治の創作の源泉になっていることがわかります。

さて『春と修羅』は、国際的なピアノ・コンクールに挑戦する4人の若者を主人公とした恩田陸作の小説『蜜蜂と遠雷』でも登場します。第二次予選の課題曲が宮沢賢治の詩をモチーフにした《春と修羅》（小説では曲のタイトルは「」書き）。後半にピアニスト自身が創作するカデンツァがあり、出場者がたとえば「永訣の朝」にインスピレーションを得て、あるいは賢治の住んでいた東北の自然の猛威を表現するかのようになり、それぞれの音楽をつくりあげていく様子が描かれています。また、この小説の映画化の際には4人のピアニストが演奏出演しており、藤倉大作曲の4つのヴァージョンの《春と修羅》を聴くことができます。

このように世には、音楽に携わる人たちを描いた作品がたくさんあります。ピアニストを目指す若者を主人公としたマンガに限っても、くらもちふさこ作『いつもポケットにショパン』、一色まこと作『ピアノの森』、そして忘れてはならないのは、二ノ宮知子作『のだめカンタービレ』。2006年のテレビドラマ化の際には洗足学園もロケ地のひとつとなり、多くの学生さんが撮影に参加していたことを記憶しています。これも洗足100年の歴史を彩った出来事ではないでしょうか。洗足学園創立100周年おめでとうございます。

私の推薦図書

嶋田 うれ葉 先生

(メディアアーツコース)

洗足学園創立100周年、誠におめでとうございます。この記念すべき節目に誕生したメディアアーツコースでは、一期生の学生さんたちが明日の映像クリエイターを目指し、メキメキと実力を蓄えています。私の担当する「メディア企画研究」の授業ではシナリオのイロハを学びますが、一度も書いたことがなかった学生さんたちでもしっかりと自分の企画をプレゼンするまでに成長し、今はシナリオの執筆の真っ最中です。オリジナルの他にも、歴史的な出来事や海外の楽曲をモチーフにするなど、バラエティに富んだ作品ばかりで完成が今からとても楽しみです。

さて小説には、時代を超えて何度も映像化された作品が存在します。海外の有名な作品では、シャーロット・ブロンテ『ジェーン・エア』がなんと27回！ 日本でも山崎豊子『白い巨塔』（1965年）が7回、横溝正史『犬神家の一族』（1972年）が11回、などなどありますが、今回取り上げたいのは三浦綾子『氷点』（1965年）です。この作品は国内で7回映像化されました。韓国では4回、台湾では2回リメイクされ、アジアでも大変愛されています。一体なぜこれほどまでに人気となったのか、その秘密は普遍的な愛と憎しみを描いたストーリーにあると考えられます。この物語は、とある病院長夫人が男と逢引きしている間に、外にいた3歳の愛娘がある男に殺害される場面から始まります。その後、病院長の夫は、不貞を働いた妻への復讐心から、娘を殺した憎き犯人の娘・陽子を養子に迎えます。何も知らない妻は陽子を生きがいとしますが、十数年後、夫の復讐に気づいた妻は陽子を憎むようになってしまいます。陽子は大好きな母に冷たい仕打ちを受けて嘆き苦しみ、やがて自分の出生の秘密を知り……さて陽子がどうなったのかは、ぜひ小説を実際に読んでいただくとして、ちなみに最初に『氷点』がドラマ化された時にシナリオを書いたのは、楠田芳子（くすだよしこ）さんという脚本家です。すでに鬼籍に入られておりますが、洗足学園と同じく今年で生誕100周年を迎えます。このドラマ版『氷点』は1966年の最大のヒットドラマとなり、以降現代に至るまで度々映像化されてきました。次の100年の間には、メディアアーツコースから生まれたクリエイターの手によって、新たな時代を切り取った『氷点』が生まれるかも知れませんね。そんな日が来ることを心から願っています。

図書館セミナー

「知ってるだけで得をする 今さら聞けない楽譜の秘密」

10月22日、輸入楽譜専門店の方を講師としてお招きし、楽譜にまつわる解説や譜面以外に記載されている内容の活用方法についてのセミナーを開催しました。自筆譜ファクシミリや様々な出版社の楽譜を展示しました。

セミナー内容

楽曲の種類について
楽譜に記載されていること
楽譜は1冊あればよいか
楽譜の選び方
著作権について
楽譜を購入することの意義



感想

「勇気がなく、先生に聞けなかった楽譜の種類、選び方、各出版社の特徴など、様々なことを知ることができて良かったです。」

「各出版社にそれぞれの強いこだわりがあることを、今回の講義で知ることができました。」

「ベーレンライター楽譜の序文を、日本語で読めるとは知りませんでした。早速読んでみます。」

「実際の楽譜と照らし合わせて見る事ができて、興味深かったです。」



図書館セミナー 展示コーナーの様子



展示資料

ベートーヴェン作曲 交響曲第九番
チャイコフスキー作曲 眠れる森の美女
モーツァルト作曲 レクイエム

モーツァルト作曲 ピアノソナタ第11番 イ長調KV 331

以上4曲の自筆譜ファクシミリ、フルスコア、
ヴォーカルスコア、複数の出版社を
同時に見比べられる展示コーナーを用意しました。



図書館インタビュー企画

「大学・短大まるっと調査！～全学生・教職員にアンケート～」

洗足学園100周年を記念して、図書館職員がアンケート方式でインタビューを行いました。
100年後に語り継ぎたい作品や洗足学園の好きな場所などを質問しました！



100周年記念
大学・短大まるっと調査！
100年後に語り継ぎたい作品
TOP 3

RANK


1位
(同率)

となりのトトロ
レ・ミゼラブル
はらぺこあおむし


2位

千と千尋の神隠し


3位
(同率)

この闇と光	100万回生きた猫
タイタニック	THE BEATLES
ちはやふる	アラジン
のだめカンタービレ	ラプンツェル
ノタンといっしょ	レナードの朝
ラーゲリより愛を込めて	オペラ泣いた赤おに
君の臍臓をたべたい	きみに読む物語
獣の奏者エリン	ぐりとぐら
洗足の校歌	グレイテストショーマン
バッハ平均律	ずーっとずっと大好きだよ

図書館インタビュー企画

「大学・短大まるっと調査！～全学生・教職員にアンケート～」

100年後に語り継ぎたい作品と理由 TOP3より

トトロ

「さつきとめいの姉妹愛が感じられる」
「トトロは長く愛されているキャラクターなので」
「何度見ても飽きない！」

レ・ミゼラブル

「当時の歴史的背景を描いており、歴史の教材としても素晴らしい」
「音楽が壮大で感動する」
「私が夢を持つようになった原点の作品」

洗足学園の校歌

「洗足学園がスタートを切った素敵な楽曲」
「作詞作曲とも女性の手による校歌で1世紀も歌い継がれてきたものは珍しく、歴史的にきわめて貴重」

レナードの朝(原題：Awakenings)

「健康で不自由なく過ごせていること、みんなとコミュニケーションできることの大切さを強く実感できるから」
「医学の素晴らしさも教えてくれる」

ランキング外の作品と理由

グレイテスト・ショーマン

「人のコンプレックスなどを個性として活かすことができると痛感させられる作品」

ひめゆり(ミュージカル座)

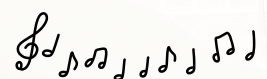
「100年経てば戦争経験者もいなくなったりと、年月が経つほど届けるのが難しくなる作品。
だからこそ100年後の日本でも上演され続けてほしい」

星の王子さま

「子どもの頃の純粋さを忘れてはいけないなと強く思わせる作品」
「“大切な物は目に見えない”というメッセージを100年後にも語り継ぎたい」

邦楽ミュージカル作品




「日本文化ならではの音楽と脚本のミュージカル作品。内容と質から見てもまだまだ評価が足りない。
100年後にはこの良さが理解され、世代を超えて見られ続けてほしい」

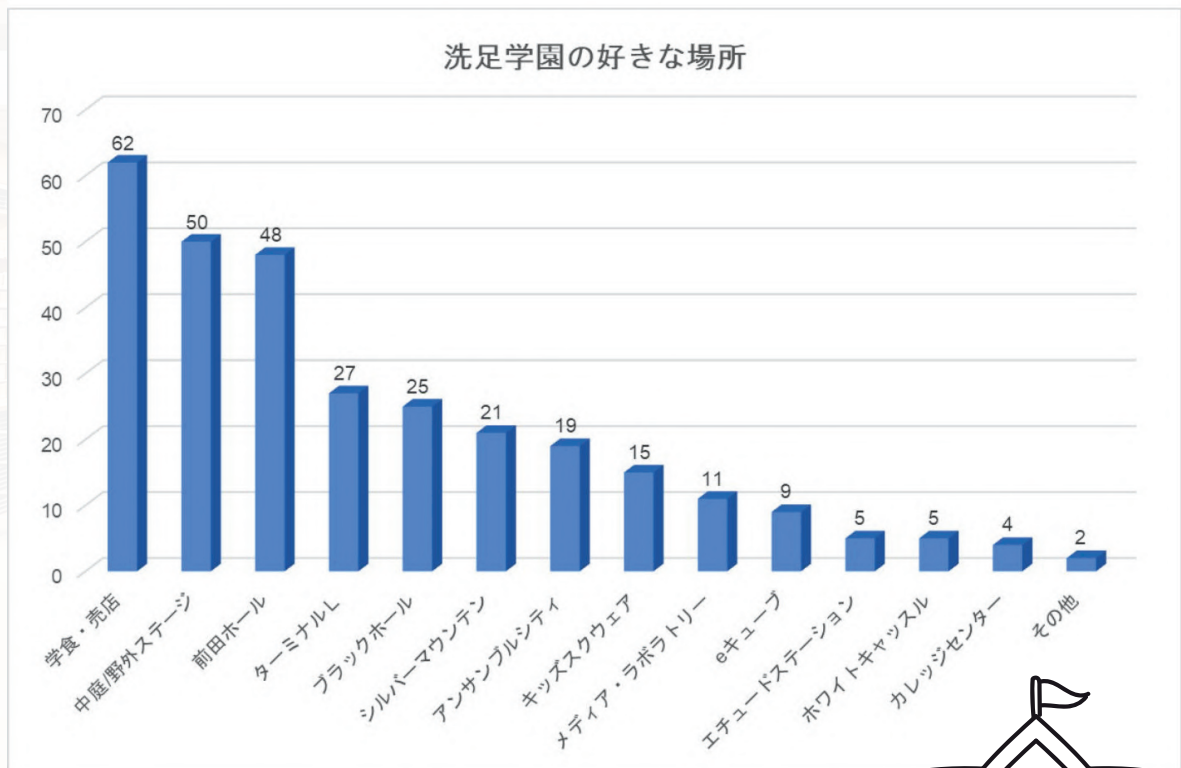


Q. 洗足学園の好きなポイントを教えてください



洗足学園の好きな場所 TOP 3

RANK		NUMBER OF VOTES
 1位	学食・売店	62票
 2位	中庭/野外ステージ	50票
 3位	前田ホール	48票



図書館インタビュー企画

「大学・短大まるっと調査！～全学生・教職員にアンケート～」

Q. 100年後の図書館はどうなっていそうですか？またどうなっていてほしいですか？

「紙媒体や活字などに触れる機会が減ってきていたり、いろんなものが電子化してきていますが、100年後であっても図書館はアナログな要素を残してほしいです。

楽譜や本も紙媒体で貯蔵してほしいなと思います。

図書館の静かで落ち着く空間が好きなので、それもそのままであってほしいです。」

「テクノロジーが進化しても、「紙」をめくるわくわくどきどきは残ると良いですね。

映像・音楽の方向ではその場に居たかのような

臨場感あふれる再生装置で疑似体験ができるようになるといいですね」

「貸出返却やレファレンスサービスに関しては、リアルに全自動になっていそう」

「本の題名を呼んだら本棚から出てきて自分の前までゆっくり飛んできて欲しいかな」

「世界中の全ての本が閲覧可能で、その場で翻訳してほしい。

返却は本が勝手に戻って行ったら可愛いし、便利ですね」

Q. 100年後の洗足生に一言お願いします！

「2024年ではまだ空想でしかないこともきっと実現できる時代に生きているかと思います。

自分の無限大の力を信じて、チャレンジを続けてください！！」

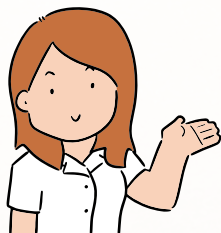
「200年刻まれた歴史の上に皆さんはいます。

これまでの200年に思いを馳せ、次の100年に向けて洗足学園音楽大学の地で思いっきり学んでください」

「ひとりひとりの「らしさ」が輝く豊かな芸術を～これからも期待しています！」

「AI化していく世の中に負けず、人が出す音楽で感動を届けて欲しいです」

「自然が豊かで、施設や設備も充実したとても良い学校です。ぜひ大学生活楽しんでください。」



アンケートにご協力いただいた皆様
本当にありがとうございました！
洗足学園200年目が楽しみです！

図書館ミニコンサート

「SENZOKU Library Mini Concert」

洗足学園100周年を記念して学園祭初日11月9日、図書館ではミニコンサートを開催しました。
学部と短大共通の施設である図書館が、学生さんの垣根を超えた学びや交流の起点となり、
充実した学園生活を送ることができるようサポートするために生まれた企画です。
約400名ものお客様にご来場いただきました！

コンサート内容

第一部：小さな演奏会
100周年に関連する作曲家の作品の演奏を中心とした
コンサート

第二部：朗読×演奏
短大生や声優アニメソングコースの学生による
本の朗読と演奏のコラボ



コンサートの様子①

第一部：小さな演奏会
学部生、職員が参加しました。
日頃は音を出せない図書館で、
様々なアンサンブルによる素敵な響きを
楽しむことができました。



コンサートの様子②

第二部：朗読×演奏

コースや学部,学科の垣根を超えて編成されたグループが創り上げるお話と音楽の世界。見事なチームワークと素晴らしいパフォーマンスにお客様は引き込まれていました。図書館ならではの企画でした！



出演者の感想

「普段関わらないコースの方とも関わることができる貴重な機会でした。当日、たくさんの方が聴いてくれたこともすごく嬉しかったです。」

「いつも静かな図書館が賑わっていて楽しかった。想像以上のお客様の前で、チャレンジ出来て良かった。」

「プログラムが進むにつれどんどん人が増えていったのはとても驚き、緊張しました。たくさんの方の拍手の中、終わることが出来てとてもうれしかったです。」

お客様の感想

「普段、音出しのできない図書館でコンサートを開催がとても良い試みだと思いました。図書館の螺旋階段や照明と楽器との相性が良く素敵な雰囲気でした。来年も開催を期待しています！！」

「それぞれの作品が魅力的でした。コースを超えた交流から生まれるパフォーマンスが、それぞれの物語の世界観を作り、とても豊かな時間でした。」

「“図書館の今後のありかたを考え”というコンセプトの元に行われたとても良い試みのコンサートだと思いました。」

「とても良いイベントでした。子どもたちも受け入れ、みんな楽しんでいました。朗読と演奏の組み合わせも良かったです。来年以降も是非続けて欲しいです。」